

KSKP サロン・あべの

NO.63

あべのカーニバル



サロン・あべの八月の出会い

小さな秋が見物に来たような風が吹いた平成三年八月四日(日)

の午後三時〜九時府立工芸高校グラウンドに於て「あべのカーニバル」が開催された。その会場の「なんでも市通り」の一角にハサロン・あべのVはバザーの店ハさろん亭Vを開いた。

今年のハさろん亭Vは、二区画を使用し売り場面積は倍増。

午後一時、区身協のカークラブ員と委員の車六台で物品の搬入。現地集合したお手伝いの方々と合流してテント張りにとりかかる。

毎年のことながらテント屋根がスクツと立ち上りハさろん亭Vの横段幕が張られた瞬間は、参加者全員の「やった」という思いが白い屋根いっぱい注がれる。

一つずつ品目別に並べていく間にも品物の下見をされるお客さんが、チラホラと見え「あれはない

の。これは何」と声がかかる。店らしい体裁がととのった頃には、お顔馴染みのお客さん方も加わってハさろん亭Vは大賑いとなっていく。

品物を寄贈して下さった人、買って下さる人、販売等のお手伝いにかけてつけて下さる人達によってハサロン・あべのVは毎年多くの方々との出会いの輪が広がっていく。

ハさろん亭Vを訪ねて、和歌山から来て下さったり、一年ぶりに会いに来てくれた人、なつかしい顔、にこやかな声、サロンの仲間を励まし見守って下さる方々との出会いは、この日ならではのものとなる。

ハサロン・あべのVは、今年初めてオリジナルグッズとして「メモ」帳をハさろん亭V店頭において販売した。

中央の櫓が組まれた舞台では、地域の婦人団体の体操や高校生のクラブ活動のブラスバンドやバト

ン演技が繰り広げられた。

何と言ってもこの日のメインは、リオのカーニバルで有名なサンパリズムに乗った華麗な踊りは、周囲の喧騒を一瞬忘れさせてくれた。テントがかたづけられ、電気が灯もる頃になるとゆかた姿の人達が目立ち始める。カラオケの音が夜空に吸いこまれていき、フィナーレの盆踊りが始まると、今年のハさろん亭Vも閉店となる。

多くの方々を支えられて今年も無事に終了出来ました。ありがとうございました。



第六回ハさろん亭Vの売り上げ

金一二一、八五〇円

八月のカンパ 金三四、〇〇〇円
ご協力、ありがとうございました。

ハサロン・あべのV運営委員会

会 計

＃ 感謝 します ｛

八月四日のあべのカーニバルでのハさろん亭Vの開設に際しましては、多くの皆様方のご協力、ご支援をいただきました。ありがとうございます。お陰様でハさろん亭Vは、盛況な出会いの場となりました。又、カンパ・冊子・はがき・切手・飲料水・お菓子等、ありがとうございました。お礼を申し上げます。



あいか彩子、赤松憲二、秋野富美子、旭 純子、安達尚子、石田 惣、石田花子、石田 律、石原ふみ子、伊勢村和子、植松菊雄、上平幸雄、宇野律子、大高澄子、大塚一枝、岡本登志子、小川和子、小川 哲、大阪義肢装具センター、加賀谷 正、柿岡 緑、笠原美和子、金子花江、河合恵子、木村圭子、黒羽玲子、斉藤良造、阪口悦子、崎本ヒサエ、塩井澄子、鹿野敬一、大丸昭典、高橋澄子、竹下秀樹、竹村定子、田中マサエ、田辺さかえ、津村孝子、土居由美子、富田万里子、富田慶子・十一・御喜代・実幸、中西利香、中原友喜、永井美智子、南光龍平・仁子、松川耕三、松島春子、松谷裕子・姉、町野旬子、松森美智子、丸山寿美子、三木法子、三谷勢津子、水戸春子、森下公子、森田ゆきえ、長谷川マキエ、濱 康子、原田 仁、広岡泰枝、八木千代子、山村貴司、山田絹代、倭 満也子、山本鈴子、山本敏子、山本ハツエ、湯浅真佐子、吉原和朗、吉田 毅、匿名四名様(敬称略)

あべのカーニバルの
〈さろん亭〉に参加して



■旭 純子

最近サロンへの参加がなかなかできない私ですが、一年振りの「さろん亭」は幸か不幸か「文の里」の不参加もあり、ゆっくりとリ店員さんリをすることができました。曇りがちで雨も心配されたけれど、直射日光にあたることもなくかえって良かったですね。

毎年出ている「さろん亭」を知っていて来てくれる人達もいる反面、開店直後よりやって来て「半額にしとき」とあたり前のように云う人もいたりして、ちよっぴり腹立たしいような気もしました。

日本では、バザーと云うと「安くて当たり前」「ただ同然」の感覚が一般的だとわかっていてもリチャリティーリとして普段よ

り高く買うという欧米との相違を改めて見せつけられて残念でした。そして、そんなことを云うのが決って普通のオバタリアンなのです。それと同時に「半額にしとき」と執ように云うオバサマのお目当ての「お皿セトリ」を引き渡すのが嫌さに思わず買ってしまふ私自信の性格…これをオバタリアン予備軍と云うのでしょうか…？気を付けなければ…。

当日の売り上げが予想以上の額だったそうで、何はともあれ無事に終わった「さろん亭」。皆さん本当にご苦労様でした。

あべのカーニバルいつまでも



■湯 浅 真佐子

カーニバルの時は、ほんの少ししかお手伝い出来ずに申しわけなく思っています。目標額を超えられたというところで、良か

ったですね。「さろん亭」に寄せていただいて、何度かお会いしていた方にも、初めての方にもたくさんお会いできて、うれしかったです。

地元ということで「さろん亭」にいると友達や近所の人、勤務先の園児などにも会い「えー、なんでこんなところにおんの？」とみんなの声。でもしっかり品物は買ってもらい「サロン・あべの」を宣伝しました。

カーニバルに参加することで「サロン」が色んな人と出会い、輪が毎年毎年広がっていくんじゃないかな？と感じています。

カーニバルは、店が出たりクイズ大会をしたり、外国からのダンサーの方を招いたり、催し物はたくさんあります。一つずつきれいにこなして成功！というのもありますが、お祭り好き！の私は阿倍野区全体が、もっともっと盛りあがるカーニバル…お祭りにならないかな？と思っています。運営していく方々のご苦労は多く、こんな意見はとんでもない！という感じですが、学生や若い人がもっと頑張っていけたらなあと思います。（私も頑張らなくてはいけません）

カーニバルもそれに参加する多くの方も「毎年の行事、夏の行事だ」ということでいつまでも続けられたら、いつまでも発展していけたらと願っています。

あべのカーニバルでの出会い



■山村 貴司

あべのカーニバルに参加させてもらうのは昨年に続いて二度目だが、今年もいい天気になった。

僕がへさろん亭Vで呼び込みをしたり、店のまわりをうろうろしていたところ、サロンによく参加していただいてるUさんがカーニバルに来られていた。目の不自由なUさんは人混みの中を一人でまわるのは危険なので誰かいっしょに出店をまわってくれる人を探されていた。僕は、自分も見

てまわりたかったので一緒に行くことにした。

人混みの中を、車椅子に乗っている僕が前に出て道をつくるように進んで行った。

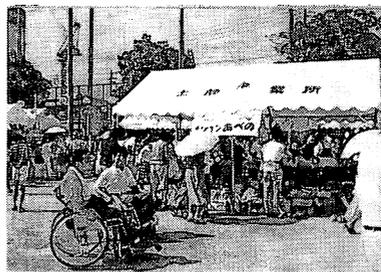
出店を一軒ずつまわるごとに品物を説明して、触れる物はできるだけ触ってもらうようにした。品物の中には説明しやすいものもあれば、そうでないものもあったので、自分の説明に不足がないか不安だったが、Uさんは明るく楽しそうな声で応えられた。ひととおりまわった後、Uさんはたくさん買い物でいっぱい袋を持ちながら何度もお礼を言うてくださった。

区役所まで見送った僕は、それなりに役立てたこと（自己満足かもしれませんが。）がうれしかった。また、肢体不自由者以外の障害者とは接する機会がそうないため相



手の立場や気持ちを理解しようとする事は難しいと感じながら、楽しく過すことができている経験になりました。

あべの・カーニバルの思い出



■上 平 幸 雄

昨年のカーニバルはちょうどお盆と重なってしまい、参加できませんでした。今年会場には来ていたものの、「サロン亭」の手伝いもそっちのけで、子供と遊んでしまいました。

夏の間、五日・十五日・二十五日と五の付く日に、地下鉄昭和町駅の近くに夜店が出るのをご存じでしょうか。この夜店にはほぼ毎回、親子三人で出かけます。子供はまだ三歳五か月ですが、輪投げやパチンコ、それにスマートボールが得意

です。金魚すくいやスーパーボールすいも好きですが、まだまだ上手にすくえません。でも、とにかくひととおりの夜店を見て歩き、帰りにソフトクリームを食べるのがお決まりのコースになっています。

そんなわけで、カーニバルの日も会場の中よりも、道路に出ている露店でまずひと遊び。会場の中に入っても、ただの買い物ではなく、ガラガラと抽選をさせてくれるところで、テレホンカードやジュースを買わされてしまいました。

「サロン亭」では、みなさんに『大きくなったね。』と言ってもらいました。また、子供が一歳になるまでお世話になった、「どろんこ共同保育所」の保育さんにも、『先生のこと覚えてるかな?』などと、声をかけてもらっていました。いままでは、どこかに遊びにいっても、すぐ忘れてしまいました。そろそろ、大きくなって記憶に残る頃ではないかと思えます。今年のカーニバルは子供にとって、さて、どんな思い出になったのでしょうか。

ナンパイの

ひとこと&ふたこと。

あるテレビドラマ

「遠くへいくんだ」というテレビドラマを見た。知人のひとりが、このドラマに出ることを今年の年賀状で知らせてくれたので、いつ放送されるか楽しみにしていた。それが、やっと夏も終わりのころに放送されるといふ。永く待たされた分、期待も大きくなって「さあ、どんなドラマか見てやろう」という感じを見た。そんなこともあってかどうか、期待していたほどには正直なところ「いまいち」の内容だった。

一番気になったことは、障害者の描き方

で、どうにも暗すぎるように感じられていなかった。(一般にはウケるだろうが)簡単にドラマのストーリーを紹介すると海外旅行の添乗員である主人公の結婚披露宴で、脊髄損傷で車椅子の障害者の友人がスピーチの中で障害者の海外旅行の困難さを訴えたことがきっかけで、障害者のオーストラリアツアーが実現。いろいろなアクシデントを乗り越え参加者各々が海外旅行の素晴らしさを満喫して無事帰国するというもの。

最後に字幕で「このドラマは十数年前の事実をもとに製作された。現在は障害者の海外旅行にも改善が見られるが、問題点もまだ多く残されている。」という説明が付けられていた。

「やっぱりそうか」

どこかに時間的なズレを感じながら見ていた私が、見終わってすぐに思わず口を突いて出た言葉がこれだった。

というのは、多少言い過ぎることになるかもしれないが、現在ではたとえ車椅子の障害者でも本人に行きたいという気持ちと費用さえあれば、それ程海外旅行も困難なことではなくなっている状況で、現実にも海外旅行を経験しているし、周囲にも何回も出掛けている人達も多い。無論、障害

おしらせ

十月の出会い

日時 平成三年 十月十九日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニケーションセンター二階

研修室「スロープ、車椅子トイレ

あり」大阪市阿倍野区阪南町五-

十五-二八

内容 「社会福祉のQ・O・L」

(クオリティ オブ ライフ)

パネラー

府立大学社会福祉学部助教授

定 藤 丈 弘 氏

会費なし

問い合わせ TEL 06-691-1028 (富田慶一)

者全体からみればごく一部の人達に限られていることは確かだろうが、かといって飛び抜けて特殊な存在という程のものではなくなってきたように思う。

今回のドラマが訴えたかったのも、こんな時代の変化をふまえた様な「海外旅行」という出来事を通して、障害者も社会のなかで決して特別な存在ではなく、健常者とともにあたりまえのこととして生活していくことの大切さだったのでは、と思う。

《新》なんとかしてエくな

地下鉄の階段

林 三起子

私が一人で外出するときは、電動車椅子を利用してきます。が、もよりの駅と言えば、地下鉄かバスの住之江駅しかありませんので、困っています。

特に地下鉄の住之江駅は、特別、階段が多いのです。電動車椅子は、重いので抱えて乗降してもらうことは到底困難ですし、

しかし、残念ながら画面に描かれたものは、暗く重たいものを引きずってそれでも懸命に生きているといったパターン化された障害者像と、カッコよくて行動力にあふれる健常者の姿だった。(やはりここでも

このほうが一般ウケするから・・・?) 「たかがドラマ」かも知れないが、もっとおおらかで明るい障害者が登場するテレビドラマを一度見てみたいものだ。

南 光 龍 平

通行人も全く通らない時もありますので、エレベーターの設置を一日も早くして欲しいと想っています。又、リフトバスの運行もこの路線からして欲しいと思っています。今のところ外出する時は、手動の車椅子に乗っていますので、まず介助者探しからしなければなりません。一人で外出出来るように、ぜひとも「なんとかしてエくな」と希っています。

Volunteer Center

5

四 社協と民間のボランティア

センターの比較 ①

前回までのボランティア活動自体のことに代わって、今回からはボランティアセンターのことに話をすすめたい。なお、ここで「民間」というのは社協以外の民間推進団体（例えば大阪ボランティア協会）のことである。社協も民間なのだが、ここではあえて分類しているのでご了承願いたい。それではまず、社協と民間のボランティアセンターの基本的な性格の比較である。社協でのボランティア活動は、基本的には「一般的な市民活動としてのボランティア

活動ではなく、社協の独自機能である地域組織化活動と一体化した活動」という位置づけが強い。しかし、設立の経緯などによつて、大きくは「社協・ボランティア一体型」と「社協・ボランティア協力型」があり、一体型はボランティアの活動の種類なども社協の事業方針によつて決められるもの、協力型は社協がボランティアに援助を行う代わりにボランティアは社協の活動に協力するというもの、と違いはある。

社協では、そのころからすでに在宅福祉のサービス供給への志向性が高まっており、その担い手としてボランティアへの期待が高まっていた。社協自体の傾向にあわせて、社協のボランティアも運動体としての性格



は弱くなってきたのである。

これに対して、民間はあくまで「民間性」を強調し、準行政的な性格になってきたといえる。社協とは対比をみせている。

活動する人についても、社協が地域ぐるみの活動に重点をおいているのに対して、民間では個別性や自発性に基づく参加を特徴としている。

民間性とは、岡本栄一氏によれば「自由性と開拓的創造的営為がセンターに生きて働いていること、事業推進において大半を行政に依存しない経済的自前主義があること、事業に対する公権力の直接的不介入、センターが民間主導によつて管理運営されていること」の四つがあげられているが、この点でも行政の影響がかなり強い社協においては満たされない点が多いのが現状といえるだろう。

それにしても、このような比較は多分にマニアックで「よくわからん」といわれればその通りである。まあ卒業論なんてこんなものだ、と言いわけしながら、しばらくの間はご辛抱願いたい。

原田 仁

心配病

日本語でシンパイヤウというのと、心配ばかりしている人というのだから、その言葉を聞くと、心配「性」ではなく、心配「症」という文字が浮かんでくる。前の方は性格として心配ばかりしているのだろうが、後の方になると心配する程度はすでに病的な感じで、ひとつの病気として理解できるほどのなのである。

もちろん正しい日本語としては、心配「性」なのだが、ぼくの場合はもう心配「症」である。妻からは、すでに心配「病」と診断されてしまった。

どういう感じなのかというと、とにかく心配なのである。その内容にはい

ろいろあるが、一番強いのは「飛行機墜落心配症」。テレビで飛行機事故のニュースを見ると、ああ、次はぼくの番なのかと暗澹たる思いがよぎる。

外国の社会福祉の動きなどを研究しているために、どうしても数年に一度は、飛行機に乗らなければならぬ。旅行社に飛行機の予約をしたその日から、ぼくは墜落の予感に苦しむ。それだけでなく、飛行機事故の本などをかなり買い込んで読んでいる。図書館に行つて過去の墜落の新聞記事を探して、電卓で何度も「墜落率」を計算したりする。

読者の同情を得るためにぼくの「特殊事情」を説明すると、生まれて初めてヨーロッパ行き航空券を予約したその日の夕方、早くもテレビは、南アフリカ航空機墜落のニュースを流していた。ぼくは恐怖のあまり声を失ったが、続いて数時間もたないうちに、こんどは大韓航空機が行方不明になっているという。一瞬、遂に自分にも幻聴が現れたのかと思った。というのも、ぼくが予約したのは偶然にも大韓航空機だったのである。

何かの予兆ではないか。飛行機には

乗るなど、神サマか、「守護霊」か、そんなものが教えてくれているのかもしれないと真剣に思ったものだ。

次の長距離飛行でオーストラリアに行つたときには、向こうでキャセイ航空機が香港で落ちたことを知る。そこからの帰りは、飛行機が大揺れに揺れて、あげくの果ては「燃料が無くなったので近くの空港に着陸する」と、アナウンスがあった。よくあることだそうだが、飛行中は神に祈っていた。

先日、時限爆弾が、日本航空機に積み込まれる直前の荷物から発見されたという。乗客の一人は、テレビのインタビューに「まさか自分のまわりでこんなことが起こるとは思ってもいませ



んでした」と言う。人はさまざまだ。ぼくだったら「いよいよ自分の番かと思いました」と答えたにちがいない。

この「墜落心配症」の長所は、あるとすれば、無事帰ってきたとき、なにか蘇生感というか、生き返った感じがすることである。ああ、またこの青空を見ることができた、この草木に触れることができたと思う。そんなことを成田空港で真顔で考えられるのは「心配病者」だけの特権である。

また、この「病」は、毎日毎日自分の死を考えながら生きていくという、古代ギリシャの哲学者のような生活を与えてくれる。平々凡々たるべく如き人間の生活に、多少とも哲学色が加えられているのだとすれば、まさにこの心配病のおかげであるにちがいない。

夏の暑い日に昇るアスファルトの坂道でふと思う。九月に飛行機旅行をひかえた「心配病者」にとつては、この人生には無関係な路傍の雑草も、肌着を濡らす不快な汗も、等しく愛おしい生命（いのち）の現れである。妻の不可解な愚痴めいた非難も、やはりかけがいのない思い出のように耳に快い。心配病者もまた人生を楽しんでいるのである。

(知)



ふれあいフェスティバル

平成三年九月八日(日)午前十時〜午後三時、長居の球技場で「第六回ふれあいフェスティバル」が大阪市社会福祉協議会設立四〇周年記念の一環として開催された。

「おまつり広場」では、模擬店やバザーなど多くの店が出てにぎわい、珍しい餅つき風景も見られた。

「ふくしの広場」では、ボランティア相談・介護教室・入浴サービスの紹介コーナーが設けられていた。

その他「たいけん広場」「わんぱく広場」「ふれあい広場」等があり、それぞれのコーナーでは、思い思いに楽しむ人達があふれていた。

そのお祭り気分には沸きあがっている一角に、別世界の静かなお茶席が設けられ、ここでは、ボランティアの方のほかに、視力・聴言・肢体障害者の方々の日頃のお稽古の成果を披露されていた

長編記録映画

「しがらきから吹いてくる風」

監督/西山 正啓

この映画は、精神薄弱者施設・信楽青年寮で生活する人たちが、地場産業である窯業に就労し様々な葛藤を重ねながらも、おおらかに働き、生活している姿を七ヶ月にわたり記録したドキュメンタリー映画です。

主催(社)大阪ボランティア協会・映画会実行委員会

とき 十月四日(金)・五日(土)

ところ コスモ証券ホール

「大阪市中央区今橋一―八―十二

コスモ証券ビル八階」

料 金 前売 一三〇〇円、

当日 一六〇〇円

中高生/一三〇〇円

(前売・当日)

コンサート・トークショー参加
は一〇〇〇円プラス

連絡先 Ⅱ Ⅷ・〇六―三五七―五七四一

美智子のこんな話



岸田 美智子

スウェーデン生活体験記

3

初めて見た見た異国の地、ストックホルムの町並みは、日本より少し暗い（日が過ぎると落ち着いた良い街だと思いましたが）ような気がしました。また、道路を走るトヨタやマツダなどの日本車の多さには驚きましたが、同時に早くも懐かしく思っていました。

ほかに気が付いた事は、点字ブロックがない事、あちこちの道路や建物には段差も多い事でした。それに、車椅子もこの日は見掛けませんでした。そして、ただ目付いたのは、背の高い大きなベビーカーが多くて、それを押しているのが、殆ど男性だ

という光景でした。何も知らなかった私は、期待はずれかなあと少し失望しはじめていました。

でも、空港バスにはリフトと車椅子用トイレが付いているし、八台の車椅子がそのまま固定出来る、このバスの乗務員の車椅子の手慣れた固定の仕方にも、日本とは違う何かがあるなあと感じていました。

スウェーデンに着いて二日目、この日だけが唯一の、全員で出来るストックホルム市内観光日でした。

「北欧のベニス」と形容されるストックホルムは、大小十四の島で出来ており、とても湖と緑が多く、自然の豊かさ美しさでは屈指の町。

その町並みは古いものを残し、彫刻なども多く全体としては、日本より落ち着いた町でした。その地形から、フェリーに乗る事も多く、私も車椅子のまま乗ったのですが、さりげなくスロープもありました。



て、これまでの取り組みでは応じきれなくなり「作業所」作りが必要となってきました。「作業所」といえば「障害者が集って何かしている所」というイメージがありますが、私達は、従来の「作業所」のイメージから離れ、「施設や地域の障害者の自立と社会参加を推し進めていく場」としての「作業所」を運営していきたいと考えています。

ぜひ「作業所」建設カンパに、ご協力をお願いします。

.....

カンパ希望額：10万円1000.
郵便振替口座：大阪3-76086

「作業所建設準備会」宛
住所：大阪市住吉区我孫子西
1-14-10古田方
TEL. 06-607-8260.

障害者の自立にご協力を！

「障害者・就職と職場の懇談会」と「施設の障害者・外出サービスネットワーク」は、障害者の自立をめざし、活動しているグループですが、現状では参加されるメンバーの多様化で生活と仕事に関し

<サロン・あべの>第63号 編集：サロン・あべの 運営委員会 定価 100円

(〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028富田慶子)

印刷：セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365.

一九九一年九月二日発行(毎日発行)KSKP通巻一七五六号一九八四年八月二〇日第三編郵便認可
発行人：関西障害者定期刊行物協会 大阪府城東区中浜二一十三番橋本ビル3F・アド企画発行